

# キャリアに効く職業訓練——求められるエンプロイアビリティとは

法政大学キャリアデザイン学部教授 川喜多 喬

オードリー・ヘップバーン主演の映画『マイフェアレディ』の原作、『ピグマリオン』で、貧しい花売り娘が大学教授に引き取られたと知って、父親はこう叫ぶ、「これで私の娘もキャリアを得たというわけですね！」

バーナード・ショーが活躍した頃には、キャリアとは出世コース、今で言う「勝ち組」になることを意味していた。キャリア組とは決して下積み之苦勞を知らぬ人のことである。だから、私が法政大学キャリアデザイン学部を作ったら、東大法学部に対抗する学部を作ったと誤解した高校校長がいたのも、故ないことではない。

映画では若い女イライザは大学教授と結婚することを予感させるシーンで終わるが、原作の小説では没落貴族の若い男フレディと結婚する。初老の大学教授は決して若い娘に持てない。こういう現実感覚をちゃんと持たねばならぬ、と諭すのが高校・大学などにおけるキャリア教育の神髄である。好きな仕事、楽しい仕事だけをしていたい、というガキの首根っこを押さえて現実を見せねばならぬのである。

大学教授と結婚するという「キャリア・アップ」を棄てて「キャリア・ダウン」を選ぶのもキャリアデザインの一つであるから、既にキャリアとは必ずしも立身の道ではない。とはいえ、年収数千万

にして、他人に質素を説くテレビ評論家とは違い、実際に巷に出て見れば、茨の道である。「若い！と誰もが心配するけれど、愛があるから大丈夫」とは妄想であって、愛があっても大丈夫ではないので誰もが心配しているのである。そこでイライザとフレディは学校に通って生花店の経営技法を学ぼうとする。ちゃんとバーナード・ショーが序言で書いている。バーナード・ショーはこの私と同じく、くどくどと序言を書くことで有名であったのだ。求めるキャリアを得ようとするればしばしば、職業訓練を受けなければならないこと、かくのごとく、改めて言うまでもない。

ではどこで職業訓練を受けようとしたか。社会改良を目指したフェビアン協会が後援した、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスである（実際にはあとにアンド・ポリシー・サイエンスとついている。経済学は政策科学ではないのである、あんなものが政策に役立つわけではない、政策はモデルと正反対のところにある）。法政大学でキャリアデザイン学部を作ろうと言いだしたら、職業訓練校じゃあるまいし、と反対した学者がいた。大学も高校も中学校も職業訓練校にならなければならない、と言う私は少数派である。職業教育を資本に役立つ人物養成だと反対している先生も組合にもキャリア



教育などできっこないので、しかたがないので企業や行政が職業教育をやる。企業は自社に役立つことをし、行政は誰に役立つかわからないことをやるので、労働力流動化時代のエンプロイアビリティ（雇われるだけの力）が不安になるのは、当然のことである。

とはいえ先進国では世界で最も失業率が低い国がわが国だから、エンプロイアビリティを身につける、そのために資格だ、自己啓発だ、ビジネススクールだ、MBAだ、キャリアプランだ…と追い立てる風潮には疑問なしとしえない。浮ついた論議に対抗して立派な科学的研究がこの号には特集されていることを期待する。なおピグマリオンは自分の作った像に恋した男である。コンピテンシーとはいま会社で出世をした特急組の行動特性である。それに恋しると経営者が怒鳴って果たしてその企業は雇用吸収力を持てるや否や。個性重視とうめぼられるや否や。